

氏 名	太田啓子
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	第5400号
学位授与年月日	平成21年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学 位 論 文 名	「軽度」身体障害者の生活障害にみる障害観の変容に関する研究 －資格取得者を中心とした肢体不自由者へのライフストーリー・インタビューを通して－
論文審査委員	主 査 教授 堀 智晴 副 査 教授 白澤 政和 副 査 教授 畠中 宗一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「軽度」身体障害者の生活障害における障害観から、彼らの社会参加における特性を明らかにした質的研究である。本論文で着目する「軽度」身体障害者の生活障害は、他者との関係性における困難、物理的障壁に対する困難、「加齢」に伴う身体状況の変化とする。

第1章では、「軽度」身体障害者の操作的定義と、「軽度」身体障害者を取り巻く社会の現状について、障害者福祉施策の視点から課題点を整理した。第2章では、本論文における研究の方法を示した。

第3章から第5章までは、「軽度」身体障害者の障害観についてライフストーリー・インタビューによる実証的研究を行い、「軽度」身体障害者の障害観を分析し考察した。第3章では、「軽度」身体障害者の障害観変容のライフサイクルとは、①健常者へのあこがれが強い障害の否定期、②ネガティブな障害の経験から開き直れる時期、③「重度」化によって障害との折り合いをつける時期であることが示された。第4章では、「軽度」身体障害者の困難な場面への対処のプロセスにおいて、①一人でできることに意味見出す、②他者との「ほどほどの」関係性を重視する、③重度化による生活の変化への不安という障害観が明らかとなった。第5章で、これらの障害観は、時代背景に大きく影響を受け、世代によっても異なることが示された。

第6章では、第3章で明らかにした障害への意識の視点から、「軽度」身体障害者の社会参加における特性を明らかにした。すなわち、①他者との関係性において自己呈示の方法が問題となりやすいこと、②「福祉」や「サービス」の利用が限定的であること、③経済的余裕を根拠として社会参加の幅を広げることである。「軽度」身体障害者は現状の「福祉」や「サービス」の利用が限定的で、むしろ問題となるのは制度でカバーできない他者との関係性における自己呈示の方法であった。

以上で示された知見から、第7章では、「軽度」身体障害者に対する支援のあり方について、社会基盤の整備に関する視点、福祉サービスのあり方に関する視点、情報サービスへのアクセシビリティに関する視点、工夫の創出に関する視点、教育に関する視点、「軽度」身体障害者の自己呈示に関する視点の重要性を導き出した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

これまで「軽度」身体障害者の多くは、「社会参加」をするうえで特段のサポートを要しない人たちとして問題の俎上に取り上げられることは少なかった。また「軽度」身体障害者に関する先行研究は、他者との関係性における葛藤に関するものであった。「軽度」身体障害者は、日常的には困難な場面を自分なりの工夫で乗り越えており、健常者が圧倒的に多いこの社会の中で困難な場面に対処する過程には「軽度」身体障害者としての特性があると考えられる。

このような「軽度」身体障害者に対する支援のあり方について考えるために、本論文は、「軽度」身体障害者の生活障害における障害観から、「軽度」身体障害者の社会参加における特性を明らかにした質的研究である。「軽度」身体障害者の障害観変容のライフサイクルと「軽度」身体障害者の困難な場面への対処のプロセスを明らかにし、さらに世代によって時代背景から受けた影響の差異について考察を行っている。

本論文では、生活障害を、他者との関係性における困難、物理的障壁に対する困難、「加齢」に伴

う身体状況の変化の 3 点において捉え、「軽度」身体障害者に関する研究が他者との関係性に焦点をおいた研究が中心であったのに対して研究を一步進展させたと評価できる。

本論文は、対象事例が 10 名と限られ、研究結果を普遍化するには不十分であるが、「軽度」身体障害者を対象としてライフストーリーを聞き取る質的研究を行い、「軽度」身体障害者の社会参加の特性を明らかにした点は高く評価できる。本研究における解釈をさらに吟味し考察を深め発展させる必要があるが、「軽度」身体障害者のライフストーリーに対する解釈モデルを提起しているという点で高く評価できる。今後のこの種の研究の重要な先行論文として位置づけられると考えられる。

以上の審査結果から、本論文は、博士（学術）の学位を授与するに値するものと認められる。